

特別寄稿

スクナヒコナを踊す神

―案山子薬神考―

河田 千代乃

筑紫舞「案山子」

筑紫舞に「案山子^{カガシ}」という舞がある。舞の内容は次のようなものである。

稲刈の終わった田の中に案山子がぼつねんと立っている。案山子は、ずっと稲の稔りを見守ってきたのに、今は、刈田に一人残され、誰にもかえり見られないと恨み言を言う。

すると神は、その労をほめ、ほうびとして、もう一本足を与えたのである。

案山子は喜んで、山へ帰って行くのであった。

舞人は、案山子の態^{てい}で、一本足で所作を演ずる場が多い。また、にぎやかな、稲刈り風景なども舞う。最後に神からもう一本の足をもらって二本足となった案山子が、うまく歩くことができず、それでも嬉しそうにぎこちなく歩きながら山へ帰る様子を、滑稽に演じるのである（写真「案山子」）。

筑紫舞の伝承では、案山子^{カガシ}は、「香具子^{かぐし}」である。田を守る神で、草人形^{くさひとがた}である。しかもその草は薬草である。案山子は、「稲の稔りを促す薬草を束ねた十字の草人形^{くさひとがた}」だと伝えている。



筑紫舞「案山子」

スクナヒコナの登場

この伝承から、日本の薬草、薬神の一面が見えてくるように思う。また案山子の源流である「山田のソホド」が、なぜ、日本の薬神スクナヒコナの神話に登場してくるのかがわかるのである。

日本の薬神は、スクナヒコナの神である。『古事記』では少名毘古那神、『日本書紀』では少彦名命、『風土記』では、少比古尼命（『播磨國』）、宿奈毗古那命（『伊豫國』逸文）また少名御神（『日本書紀』）などとも記される。

この神は、大國主神の協力者として海彼より訪れる。

故、大國主神、出雲の御大の御前に坐す時、波の穂より天の羅摩船に乗りて、鵜の皮を内剝に剝ぎて衣服にして、歸り來る神ありき。ここにその名を問はせども答へず、また所従の諸神に問はせども、皆「知らず。」と白しき。ここに谷蟻白しつらく、「こは崩彦ぞ必ず知りつらむ。」とまをしつれば、すなはち崩彦を召して問はず時に、「こは神産巢日神の御子、少名毘古那神ぞ。」と答へ白しき。故ここに神産巢日神の御祖命に白し上げたまへば、答へ告りたまひしく、「こは實に我が子ぞ。子の中に、我が手俣より漏きし子ぞ。故、汝葦原色許男の命と兄弟となりて、その國を作り堅めよ。」とのりたまひき。故、それより、大穴牟遲と少名毘古那と、二柱の神相並ばして、この國を作り堅めたまひき。然て後は、その少名毘古那神は、常世國に度りました。故、その少名毘古那神を顯はし白せし謂はゆる崩彦は、今者に山田のそほどといふぞ。この神は、足は行かねども、盡に天の下の事を知る神なり。

（『古事記』）

国作りを始めようとしていた大國主神のもとへ、海の向こうから、芋のくり抜き舟に乗り、鵜（虫？）の皮を着た小さな神がやって来た。名前を聞いても答えない。お伴の神も誰一人その神のことを知らない。そこに一匹の谷蟻（ひきがえる）が出て来て、「こ

れは、崩彦が知っているでしょう」と言った。そこで崩彦を呼んで聞くと「これは、神産巢日神の御子の少名毘古那神です。」と申し上げた。神産巢日神にお聞きすると、「これは誠に私の子だ」と言われ、「大國主神と協力して国作りをせよ」と命じられた。

そこで大國主神と少名毘古那神は、この國を立派に作り上げた。その少名毘古那神の名を顕した「崩彦」は、「山田のそほど」という。その神話の最後に、『古事記』は、この神は、「歩くことはできないが、天下のことをすべて知っている神である。」としている。この一文によって、崩彦（山田のそほど）は後世の「案山子」といわれる田の神のことであるとされる。「天下のこと」とは、すなはち、「田」のことである。田の中に一本足で立ち、田を見守る神である。この神が「崩彦」「山田のそほど」と記されるのは、その田は、すなわち、「山田」であり、また、「崩れやすい山田」も暗示させるものである。

初め大己貴神の、國平けしときに、出雲國の五十狹狹の小汀に行到して、飲食せむとす。是の時に、海上に忽に人の聲有り。乃ち驚きて求むるに、都に見ゆる所無し。頃時ありて、一箇の小男有りて、白藪の皮を以て舟に爲り、鷓鴣の羽を以て衣にして、潮水の隨に浮き到る。大己貴神、即ち取りて掌中に置き、て、翫びたまひしかば、跳りて其の頬を嚙む。乃ち其の物色を怪びて、使を遣して天神に白す。時に、高皇産靈尊、聞きしめて曰はく、「吾が産みし兒、凡て一千五百座有り。其の中に一の兒最悪くして、教養に順はず。指間より漏き墮ちしは、必ず彼ならむ。愛みて養せ」とのたまふ。此即ち少彦名命是なり。

（『日本書紀』）

『日本書紀』は、少彦名命の登場に際し、海彼より来たことや、その姿の小ささや、やんちゃさを記しているが、谷蟻（ひきがえる）や崩彦（山田のそぼど）のことなどは記していない。

しかし、『日本書紀』は、大国主神と少彦名命が、天下を經營つた神であり医薬の道を確認し、百姓に恩頼を施した神であると記している。

夫の大己貴命と、少彦名命と、力を戮せ心を一にして、天下を經營る。復顯見蒼生及び畜産の爲は、其の病を療むる方を定む。又、鳥獸・昆蟲の災異を攘はむが爲は、其の禁厭むる法を定む。是を以て、百姓、今に至るまでに、咸に恩頼を蒙れり。

開拓神・医薬神としてのオオナムチ・スクナヒコナ

日本の国の開拓神はオオナムチとスクナヒコナである。日本の各地にその伝承が残されている。

オオナムチは大きな神、巨人と信じられ、スクナヒコナは親神の指の間から抜け落ちるような小さな神であった。

この大きな神と小さな神が協力して日本の国を作り上げたという伝承があつたのである。この二神が、農耕を指導し、医薬の道を民に教えた。温泉を湧出させ、酒作りを教え、民を病から救った。この二神に対する信仰は、神話としても残されている。

オオナムチは、『古事記』・『日本書紀』では大国主神・葦原醜男・八千矛神、大国魂神、大物主神（『日本書紀』のみ）、頭国魂神などの多くの名を持つが、開拓神、医薬神として各地

に落とされた神の名は、オオナムチが一番多い。『古事記』『日本書紀』といった中央でまとめられた神話では、各地それぞれの開拓神・医薬神を、「大国主神」という名に集約したのである。在地的にはオオナムチというのが一番親しまれた神名であつたと考えられる。

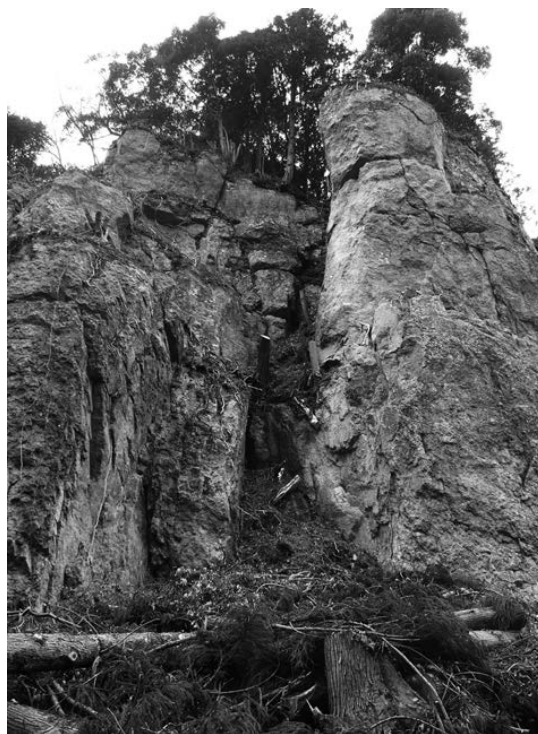
オオナムチ・スクナヒコナの開拓神としての一面は、たとえば、『播磨國風土記』神崎郡に、

稻種山 大汝命と少日子根命と二柱の神、神前の郡望岡の里の生野の岑に在して、此の山を望み見て、のりたまひしく、「彼の山は、稻種を置くべし」とのりたまひて、即ち、稻種を遣りて、此の山に積みましき。山の形も稻積に似たり。故、號けて稻種山といふ。

とある。二神が峯の上から国見をして、ここに稻種を置くようにと命じた稻種山の話には農耕指導をする開拓神の姿がみえる。

また、『同國風土記』・神崎郡埴岡の条に次のように記す。

望岡の里 望岡と號くる所以は、昔、大汝命と小比古尼命と相争ひて、のりたまひしく、「望の荷を擔ひて遠く行くと、屎下らずして遠く行くと、此の二つの事、何れか能く爲む」とのりたまひき。大汝命のりたまひしく、「我は屎下らずして行かむ」とのりたまひき。小比古尼命のりたまひしく、「我は望の荷を持ちて行かむ」とのりたまひき。かく相争ひて行でましき。數日逕て、大汝命のりたまひしく、「我は行きあへず」とのりたまひて、即て坐て、屎下りたまひき。その時、小比古尼命、咲ひてのりたまひしく、「然苦し」とのりたまひて、亦、



壙岡

其の壙を此の岡に擲ちましき。故、壙岡と號く。又、屎下りたまひし時、小竹、其の屎を弾き上げて、衣に行ねき。故、波自賀村と號く。其の壙と屎とは、石と成りて今に亡せず。一家いへらく、品太の天皇、巡り行でましし時、宮を此の岡に造りて、勅りたまひしく、「此の土は壙たるのみ」とのりたまひき。故、壙岡といふ。

オオナムチとスクナヒコネの土地争いの話のようである。「屎下らず」「壙(埴)を負う」という我慢比べでどこまで行けるか争ったが、数日で二神とも耐えきれず、オオナムチは脱糞し、同時にスクナヒコネも壙土を投げ捨てた。その糞と壙土とは堅まって石となった(写真「壙岡」)。

これは、壙(埴)岡の里の国作り神話である。埴土は、田の土

土器を作る土、そしてそれは、イザナミの糞から埴土の神が生まれたと説くように、神の糞とも信じられた。神話の背景に、この地を開拓し、農耕を指導した神の姿がある。糞が肥料になることも既に知っていたのかも知れない。

温泉湧出の神としてのこの二神の神話は、『伊豫國風土記』逸文に記されている。

伊豫の國の風土記に曰はく、湯の郡。大穴持命、見て悔い恥ぢて、宿奈毗古那命を活かさまく欲して、大分の速見の湯を、下樋より持ち度り來て、宿奈毗古那命を潰し浴ししかば、魘が間に活起りまして、居然しく詠して、「眞寔、寝ねつるかも」と曰りたまひて、の上にあり。凡て、湯の貴く奇しきことは、神世の時のみにはあらず、今の世に疹癩に染める萬生、病を除やし、身を存つ要薬と為せり

逸文なので前文が伝わらないが、道後温泉の神話である。何かのことで、仮死状態になってしまったスクナヒコネを生きかえらせようとして、オオナムチは、海底に樋を通



「玉の石」道後温泉元湯



石宝殿

播磨國石寶殿真景

石寶殿即今國東郡津和野町大字石寶殿也
大洗磯崎石寶殿真景

して九州大分の湯を引いて湧出させ、スクナヒコナを浴させた。しばらくしてスクナヒコナは生きかえり、湯の中の石の上に立った。その湯は万病を除く薬である。

今も道後温泉元湯の側にある「玉の石」がそのスクナヒコナの立った石であると伝えていいる（写真「玉の石」）。おそらく昔はこの石の所から湯が湧いていたのであろう。こうした神話から、スクナヒコナの枕詞として「石立たす」が用いられるようになったものと思う。

『古事記』神功皇后の条にも「石立たす小名御神」とある。

ここに還り上りましし時、その御祖息長帶日賣命、待酒を醸みて獻らしき。ここにその御祖、御歌よみしたまひしく、

この御酒は 我

が御酒ならず
酒の司 常世に
坐す 石立たす
少名御神の
神壽き 壽き狂
ほし 豊壽き
壽き廻し 獻り
來し御酒ぞ 乾
さず食せ ささ
とうたひたまひ
き。かく歌ひて大
御酒を獻りたまひ

また、兵庫県の有馬温泉の湯泉神社（延喜式・名神大）もオオナムチ、スクナヒコナを祀るが、この神社の元宮は「アナムチ」と呼ばれ、二つの石がある。オオナムチとスクナヒコナの腰かけ石で、二神はこの石に腰かけて、有馬の国作りを相談したという。「アナムチ」は「オオナムチ」のことで、おそらく昔は、ここから湯が湧き出していたと考えられる。今は、お旅所となっている。

また、『播磨國風土記』（印南郡）にも「作石」と出る、現在の石寶殿生石神社の御神体である巨石もまた、この二神のことだと伝えていいる。

生石神社の伝承では、この巨石は、大己貴命 少彦名命二神が作られたと言ひ、『万葉集』（卷三）に、

オオナムチスクナヒコナノイシケムシツノイハヤハイクヨヘヌム
大汝少彦名乃將座志都乃石室者幾代將經

とある。「志都乃石室」は、この巨石のことであるとしている。

開拓神・医薬の神・温泉の神としてのオオナムチ・スクナヒコナは、すべて石となって祀られていると説く。開拓神は、今もなお人々を守り続けているという意識が二神を石という姿にさせたのである。

薬師信仰との習合

医薬の道を開き、人々を病から救ったオオナムチ・スクナヒコナは、仏教の薬師の神・薬師如来と習合する。

『延喜式』 神名の常陸國鹿島郡

オオアライノザキケケンボサツ
大洗磯崎薬師菩薩神社（名神大）

と、同國那賀郡

酒烈磯前薬師菩薩神社（名神大）

の二社である。この二神の出現については、『文徳実録』に次のように記されている。

戊戌。常陸國上言。鹿嶋郡大洗磯前有_レ神新降。初郡民有_二煮_レ海爲_レ塩者_一。夜半望_レ海。光耀属_レ天。明日有_二兩_レ怪石_一。見在_二水次_一。高各尺許。體於_二神造_一。非_二人_レ間石_一。塩翁私異_レ之去。後一日。亦有_二廿餘_レ小石_一。在_二向石左右_一。似_レ若_二待坐_一。彩色非_レ常。或形像_二沙門_一。唯無_二耳目_一。時神憑_レ人云。我是大奈母知少比古奈命也。昔造_二此國_一。訖。去往_二東海_一。今爲_レ濟_レ民。更亦來歸。

すなわち、文徳天皇の斉衡三年十二月戊戌、その地の塩を焼く者が、夜半海を望むと、海上に光りが輝き、翌日見ると二つの怪石が出現しているのを見た。後一日、また二十余の小石があつて左右に侍坐するようにあつた。色が普通でなく、沙門の形に似ていた。この時、神が人に憑いて、「我は大奈母知少比古奈命である。昔、この国を作り終わつて去つて東海に往つたが、今民を救うため、また帰つてきた」と託宣した。これが中央に上奏されたのである。

大洗磯崎は、オオナムチを主神にスクナヒコナを配神に、酒烈磯崎はスクナヒコナを主神にオオナムチを配神にまつられている。海中に現出した岩礁である。

オオナムチ・スクナヒコナという二神が、仏教の薬師菩薩となつて現出しているのである。この辺りから、二神は、開拓神よりも薬神の色彩がより強くなつてくるように思われる。

オオナムチ薬・スクナヒコナ薬

平安時代の医薬書と伝える『大同類聚方』には、「オオナムチの薬」とか「スクナヒコナの薬」というのが数多く記されている。各地の豪族達は、それぞれの家の秘伝の薬を持っていたようである。

諸血

阿須波薬 大己貴神方。古志臣阿須波丸乃家伝方。

婦人血症一切。

於保世利（大芹） 佐保比女

依比須久須利 於美奈加豆良（川芎）比良与母支

水煎。 （卷之十一）

解毒

夜父薬又大兵主薬 但馬国養父郡之鯿剂磨所_レ伝方。元者大己

貴神方也。

太刀或矢疵矢湯火□火毒虫螫咬止腫乎消□所_レ立癒方也。

胡麻乃阿布良 牟加豆（蜈蚣）

二味共入_レ壺封_レ口、蜈蚣腐溶化時、湯煎漉貯。応_レ痛伝。

（卷之十九）

オオナムチ関係は、この他に、「大己貴神所授神方」「大穴持神所授神剂」「大穴持命乃方」などあつて、病氣に対する処方が記されている。

また同様スクナヒコナ関係は、

婦人通方

火国薬 肥前後国乃方ニシテ、葦北郡 姫嶋直等ノ家方。允恭御
宇奏レ之。元少彦名神剂也。

婦人乃産前後ノ良方也。常仁用天効アリ。

依比也寿 於保世利(大芹)

阿利乃比布支 万都甫度(茯苓)

比支乃比多比 袁保波古(車前草)

於味奈加豆良(川芎)

とある。その他「少彦名神方」「少彦名神乃薬方」「少彦名命乃方」
ともあつて、一つ一つの病気の処方が記されている。

『大同類聚方』に名を列ねる豪族達は、ほとんど日本全国に及
んでいて、それぞれ家伝の秘薬・処方を持っていた。その中に、
オオナムチ薬、スクナヒコナ薬というのが数多くあつて、二神が
医薬の神として全国に信仰されていたことがわかるのである。『大
同類聚方』には、出雲國造家が持っていた薬のことが記されてい
る。

也支波太加差也味

神戸薬 出雲國造乃家爾傳流方也

也紀波太也美波男女共爾謬利豆也支波之天疼支痛者

支差加比

一味乎烧支知乃於毛爾煉合也付久返之神方也

これは、「神戸薬」といつて「也支波太加差也味」すなわち、
焼けど、皮膚病の薬である。さらに「支差加比」「知乃於毛爾煉合也」
とあるところから、ただちに『古事記』の大穴牟遲神の神話が思
い浮かぶ。

オオナムチが八十神にやそがみだまされ、山から落とされた真赤に焼い

た大石を赤い猪と思つてつかまえようと抱きつき、焼けどを負つ
て死んだ。母神が、神産巢日命かんむすひのみことに助けを求めると、神はキサガヒ

ヒメとウムギヒメという貝の女神を遣わした。キサガヒは赤貝、
ウムギは蛤貝のこととされる。キサガヒは、自らの殻を削つて粉

にし、ウムギは蛤の汁で練つた薬を作り、焼けどに塗つたところ、
オオナムチは全快した。その薬は、『古事記』に「母の乳汁おものちしる」の
ようであつたと記す。乳白色の練り薬であつたと考えられる。

『大同類聚方』に出雲國造家が伝えていた「也支波多加差也味」

の薬とは、この焼けどで死んだオオナムチを生きかえらせた貝の
女神の霊薬のことであつたと考えられる。

今も出雲大社の瑞垣の内に、大国主神の二人の妃と並んで、こ

の貝の女神が祀られている。(天前社アママサキヤシロ)

出雲国が薬草の宝庫であり、中央に貢納していたことは『出雲
國風土記』に記された多くの植物のほとんどが薬草であつたこと

からも理解できる。

そもそも、『古事記』の大国主神話の始まりからして医薬信仰

が底流している。

その「稲羽の素菟いなばのすう」の神話は、肌を病む菟に、正しい治療を施
して救つたオオナムチこそが偉大な王になる資格を持っていたこ

とを証明する神話であつた。

一人の少年神オオナムチが偉大な大国主神になるためには、多
くの試練を経なければならなかつた。その試練の第一条に正しい

医療の知恵を有すか否かがまず問われたのである。

神農神とスクナヒコナの習合

神農神は、道教の医薬の神である。『史記』三皇本紀に次のように記す。

神農氏

炎帝神農氏は姜姓なり。母を女登と曰ひ、有嬌氏の女なり。少典の妃と爲り、神龍に感じて炎帝を生む。人身牛首なり。姜水に長ず、因りて以て姓と爲す。火徳の王たり、故に炎帝と曰ふ。火を以て官に名づく。木を斲りて耜と爲し、木を採めて耒と爲し、耒耨の用、以て萬人に教へ、始めて耕を教ふ。故に神農氏と號す。是に於て蜡祭を作す。楮鞭を以て草木を鞭ち、始めて百草を嘗めて、始めて醫藥有り。又五弦の瑟を作る。人に教へて日中に市を爲し、交易して退かしめ。各々其の所得たり。

（『新釈漢文大系38』）

神農は、火徳の王で炎帝と称した。人身にして牛首。耒を發明し、人々に農耕を教えた。またあらゆる草を食し、医薬の道を確立したと伝える。まさしく、開拓神・農耕指導神・医薬の神であつて、日本のオオムナチ、スクナヒコナの神と同じ神格である。

神農信仰は、平安朝には、貴族達に既に知られていた。しかも、それは、祇園牛頭天王であるとも、また薬師であるとも認識されていたことがわかる。

また、仰せて云はく、「祇園天神は何なる皇の後身ぞや」と。

予、申して云はく、「神農氏の靈か。件の帝は牛頭なり。但し、故忠尋僧正の説には、王子晋の靈なり」と云々。



台湾 道観 扁額「萬世農祖」



台湾 道観 神農



台湾 道観 扁額「神農大帝」

仰せて云はく、「神農氏なり。神農氏は薬師仏と団体なり」と。

（藤原忠実『中外抄』）

道教寺院（道観）には、神農が祀られている。台湾の道観に祀られていた神農は、肩に薬草の衣をまとい、手に穀物の束を持っている。またその殿閣には、

「萬世農祖」「神農大帝」といった扁額が懸っている。台湾では、農耕指導神と医薬神の信仰の両面が同格にあるようである。

日本では、医薬神神農とスクナヒコナが、習合したようである。近世、大阪船場の道修町とじょうまちの薬種業者が祀ったのは、この神農とスクナヒコナが習合した医薬神であった。

近世は「神農さん」、明治以降は「少彦名神社」と改称され、現代も、薬種問屋や大手の製薬会社が建ち並ぶこの町の守護神と

して篤い崇敬を受けている。

少彦名神社に伝わる画像（下図）には、薬草の衣を着て薬草を嘗める「薬祖神農神」と、同じく、肩に薬草の衣をまとい、手に薬壺を持つ「少彦名命」が描かれている。

薬草の衣は、紀州加太の淡嶋明神も着ている（左図）。淡嶋明神は、淡嶋から、粟の茎にのぼり、はじかれて常世国に帰つたと『日本書紀』に記す、少彦名神のことであるとされてい



紀州加太淡嶋明神



薬祖神農神・少彦名命（少彦名神社）

る。

そして日本の薬草売りすなわち「香具師」達も、この神農信仰のもとに結束していた。「香具師」の本来の仕事が薬草売りであったことは、よく知られている。薬草のなかには紅・白粉すなわち化粧品も入る。彼等は寺社の境内で芸能も演じ、薬や化粧品を売って神仏の信仰を説いて歩いた。

この薬草売り達をなぜ「香具師」と呼んだのか。この文字はそのまま読めば「カグシ」である。

ここでもう一度、筑紫舞の「案山子」の伝承を見てみる。

案山子は香具子で、田の神である。案山子は稲の稔りを促す薬草を束ねた十字の人形である。

この「薬草の人形」が「カグシ」と言うようになったのは、薬草売りを「香具師」と言ったことと関りがある。

『古事記』のスクナヒコナの神話では、スクナヒコナの名を顕した神は「崩彦」「山田のソホド」とあって「カカシ」の名はない。しかし、一本足で田に居る神であると記している。それが、薬草の信仰を介して「香具子」と呼ばれるようになったと思う。

『古事記』の大国主神話には、医薬信仰が底流している。ついでに言えば、大国主の足もとに「この神の名は崩彦が知っています。」と言って出てきた谷蟻（ひきがえる）もまた薬と関りがある。『大同類聚方』には、虫類部（巻十一）があり、多くの蛙が薬であったことを記している。その中に、

比支 反流 味酸久不香有毒五月捕之日爾乾或波焼灰用之

とある。乾したひきがえるを焼いて灰にして用いている。医薬神スクナヒコナとその神の名を顕した崩彦。その神を崩彦へ導いた

ヒキガエルはすべて、スクナヒコナの眷族神と考えられる。

この神話の背景にオオナムチ・スクナヒコナによるこの国の開拓にまつわる伝承が、大きな潮流となって流れていることを思わざるをえないのである。